

⑥—都心部の発展

〈都心部発展の背景〉——最近日本銀行横浜事務所ができ、県庁が建った。一方は広い敷地に平屋建、一方は13階建て49メートルの高さの建物である。この二つが建ったことは横浜にとって象徴的な意味をもっている。

戦後横浜が戦災の傷手から立直れず、市中心部の接收が続いている間に日本の復興と経済発展は着々と進み、横浜の経済的地盤沈下を決定的にした。そのあらわれとして、横浜に本社があった多くの会社が東京に本社をうつした。それは大会社ほど率が高かった。

前述したように、東京圏への人口と産業の集中ははげしく、ついに東京都内部では収容しきれなくなって、その周辺都市の人口と工業などの産業の増加がはげしくなった。横浜市も例外ではなく、横浜の郊外部保土ヶ谷区、港北区、戸塚区に人口増加がいちじるしい。これらを背景として中心商業地区はその規模を拡大した。それらの動きは昭和30年ごろからあらわれはじめ、昭和35年ごろから顕著になった。

そのあらわれがはっきりしているところに横浜駅西口がある。横浜駅の発展はまさに横浜市郊外の人口増加と歩みをともしている。

しかしながら最近の中区の発展はこれだけでは説明できない。昭和30年代にはいって経済の高度成長政策がとられ、産業の高度化がはかられた。昭和35年ごろからあきらかになってきたことは、東京への管理中枢機能の集中と産業の周辺への拡大である。本社の東京移転がおこなわれた一方、支店ながらその規模を拡大して、横浜に立地しはじめた。そのあらわれが本町通り、日本大通りを中心とする関内とその周辺にみられる大規模建築の建設であり、それを象徴するのが規模は小さいが、日本銀行横浜事務所の建設であった。

まえにのべたように東京圏の拡大はついにその周辺におよんだが、神奈川県はその影響をもっとも強くうけている県といえる。昭和35年から40年の5年間に28.7%の人口増加率で横浜市の30%にほとんど近くその影響の程度がわかる。横浜は神奈川県を中心都市としての役割りをになっている。神奈川県の人



■表1-2-19 事務所・銀行区別床面積 坪

年度 区別	昭和30年	35年	40年
総 数	167,572	207,042	451,186
鶴 見 区	37,985	39,750	86,153
神 奈 川 区	21,519	23,024	49,832
西 区	22,639	28,929	48,123
中 区	65,612	79,474	148,039
南 区	4,159	4,968	14,993
保土ヶ谷区	1,883	3,117	16,355
磯 子 区	2,977	5,094	13,529
金 沢 区	6,202	6,431	11,871
港 北 区	1,354	6,946	18,164
戸 塚 区	3,242	9,309	44,127

口の増大と産業の拡大は横浜の都心形成に大きな影響を与えずにはいない。その象徴が新県庁舎の建設であった。

事務所・銀行の建物床面積を区別に昭和30年、35年、40年を比べると表1-2-19のようになっている。区別にいえば、中区の比重が極めて大きく、市全体の3分の1におよんでいる。南区、保土ヶ谷区、港北区、戸塚区の伸びは内陸工業の増大にもとづいていると思われる。

戦後横浜は、経済的に地盤沈下したといわれているが、このように大きく拡大をつづけているのである。

〈都心部の新しい動き〉 横浜市を中心部の接収は昭和30年代まで続いた。その後徐々に解除されていった昭和30年代のはじめには、どの地区がどのような性格に形づくられていくかはっきりしなかった。昭和35年ごろから各地区の性格がかなりはっきりと形づくられてきた。

横浜には以前から伊勢佐木町通り、野毛通り、元町

などの中心的商店街があった。昭和30年代になって横浜駅西口が加わり、それらは規模を拡大しつつあると同時に名店街化、高級店化していった。

元町はもともとから高級品を売る商店街として広く東京からも購買客をあつめていたが、商店街の道はせましく、車がとまると人が歩くところがない。そこで現在1階を後退し商店が店先の敷地を提供することによって人の歩く場所をつくろうという商店街ぐるみの街づくりをしている。このことは新しい自動車時代へ対応しようというまず第一歩といえよう。

野毛通りは以前は露店商が建ち並ぶ商店街であった。昭和39年大岡川沿いに都橋から宮川橋にいたる間に野毛都橋商店街ビルを建設し、露店商長年の念願であった店がまえのビルに移転した。これにより露店商が立派になったばかりでなく、野毛通りの商店は、繊維製品小売店を中心に高級店化する動きが徐々に進んでいる。

桜木町より日の出町にいたる間、いわゆる野毛は以前から庶民的な慰楽街であったが、最近飲食店が増加しますますその性格を強めつつある。また現在桜木町駅より野毛方向に地下道を建設中である。この地下道の北側、国道と桜川新道間の商店街がビル建設を計画している。このビルと地下道に接続して地下街建設の計画がある。ここには地下鉄駅の計画もある。これらが完成すると桜木町駅より野毛への入口は面目を一新することになるであろう。

福富町も長らく接収されて復興がおくれたところであったが、その後の建設には注目すべきものがある。まず伊勢佐木町通りより直角に宮川橋にいたる福富町通りは、壁面線指定といって、地主が共同し

て1階を後退して軒の線をそろえて建物を建てる約束をしたところである。この約束にしたがってビルが建設され最近ではほとんどそろった街並ができあがった。この街並は他に例をみないきれいさ、そろった街並と個性ある店がまえをはこっている。福富町一帯は最近になって高級な飲食店がふえ、野毛とはちがった慰楽街を形成しつつある。

横浜駅西口はその出発から計画的に形成されてきた。横浜駅西口のよさは計画的に形成されていった商店街のよさにある。その形成をあとづけてみよう。

昭和31年 名品街

32年 文化会館

33年 松竹横丁

34年 高島屋

35年 西口五番街

36年 東光スター・東急ホテル

37年 ステーションビル

39年 横浜駅西口駅前広場

ダイヤモンド地下街

と近年になりますますその充実の速度を上げつつある。

関内は以前から業務の中心であったが、近年ますますその色彩を濃くし、規模を拡大しつつある。マスコミを代表するNHKをはじめ各新聞社、新聞社支社がある。本町通りおよび本町4丁目から尾上町にかけて銀行、銀行支店をはじめとする金融機関がある。日本大通りと横浜市役所より新県庁舎にかけて各官庁がある。山下町に電信電話局の多くの建物、横浜地方貯金局がある。南仲通り、弁天通りにはさ

まれた敷地に東京電力神奈川支店があり、関内からはややはずれるが羽衣町に東京ガス横浜営業所がある。もちろんいうまでもないことであるが、港側には港湾施設とそれに密接な関係のある業務施設が並んでいる。

このように関内にはめだたない動きではあるが、徐々に業務地区の形成がおこなわれていて、それらの同種類のものあとをおっていくと、おのずとある地区を形成しているのがはっきりとよみとれるようになった。

桜木町、関内、関外 桜木町、関内、関外について共通の特長は、全国にまれにみる規模の防火建築帯の指定とその建設である。これはこれまでの災害に弱い横浜の中心市街地を災害に強い都市に生れかわらせる目的で指定されたものである。戦後、沼津、静岡、岡山とこの防火建築帯は都市防災に有力な方法として注目され建設されたが、その規模からいって横浜がもっとも大きい。その特長がもっともよくあらわれている町に、吉田町、福富町、長者町がある。この防火建築帯の指定とその建設は横浜の中心市街地の形態を決定してきたしまた決定していくといていいすぎではない。